モノグラフ

メコンの筌から柴漬漁、そして日本のいかかご漁へ

橋村 修（はしむら おさむ）
本館外来研究員

民博には、日本や東南アジアをはじめとして世界各地の筌漁具（籠のなかにカエシのついている漁具）を多数展示、所蔵している。ラオスでは、筌をサイとよび、雨季と乾季の変わり目の水の動く時期に、水田の畔や水路に仕掛けてサカナをとっている（写真1）。フナやドジョウは、川から水路をあがって水田まで入ってきて、産卵する。これは最近まで日本国内のどこでもおこなわれていたので、田んぼや水路に仕掛けた筌、モンドリを思い出す方も多いのではないだろうか。しかし、日本では水田の圃場（ほじょう）整備が進むにつれて、水田にサカナが上ることができなくなり、筌を使った漁業は急減した。

ところで、ラオスやカンボジアでは、この筌が魚捕りをする人たちだけでなく、町で生活する人によって縁起物として親しまれている（写真2）。これは、一度サカナが入ると逃げられなくなるという筌の機能にひっかけて、福や財が逃げていかない縁起物となっているのだ。ビエンチャンでは実物大の筌をおいてある店や、トゥクトゥクなどのタクシーに乗るとまるで日本の寺社のお守りのようにミニ筌がぶら下がっている光景をよく目にする。縁起物には筌漁具のほかに、魚伏せ籠や魚篭（びく）などの竹で作られている漁具のミニチュアがあって、バリエーションがある。筌を縁起物とする思想は日本では見当たらない。しかし、あえて言うなら漁具の材料になっている竹に対する聖性は、日本にむかしからある。その竹製漁具も、ラオスの漁撈現場では少しずつプラスチック製に代わりつつある。

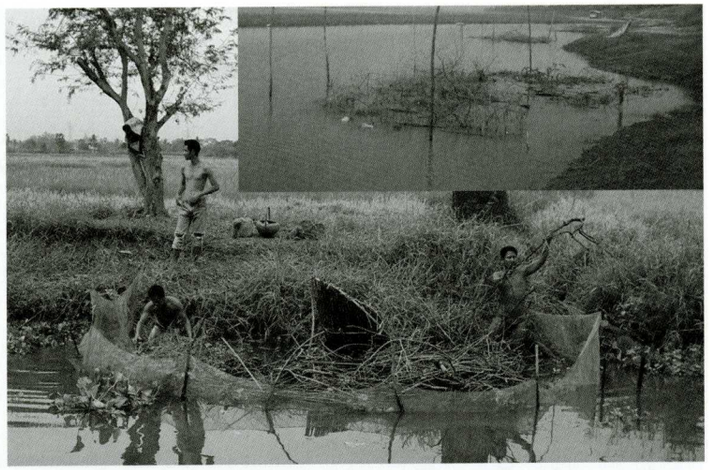
それはさておき、今度はサカナの産卵の場での漁に注目してみよう。メコン河流域の本流や水路では、枯れ木のかたまり（フム）（写真3）や大きな籠に柴を乗せた漁具（カー）（写真4）をよく見かける。これは、もちろん人が設置した装置で、サカナの隠れ家や棲みか、産卵の場という役割があり、魚が居ついたころに、人びとは網で囲んで投網を入れる。この一連の漁撈をラオスではフムないしカー、日本では柴漬漁（柴浸し漁）とよんでいる。これも、以前は日本列島の各地で見られ、特に琵琶湖では柴を入れてから二、三年待って、寝床に入ったサカナをとるネヤとよばれる人の側も辛抱する漁法があった。ラオスでは柴を入れて一ヵ月程度でとるので、今では乱獲漁業として規制されつつあるが、数年待つネヤの思想をぜひ取り入れて継続させるのも一案ではないだろうか。

また、籠と柴がセットになっている漁法は、日本の内水面ではあまり見かけないが、海に目を向けると九州地方に多い、いかかご漁がよく似ている。写真5は鹿児島の黎明館所蔵の薩摩半島吹上浜沖の東シナ海でおこなわれていたいかかご漁の籠である。写真では見えないがこの籠のなかには柴が入っている。この漁は、現在でも福岡県の玄界灘や熊本県の有明海でもおこなわれている。筆者が漁船に同乗させていただいた熊本県宇土市網田の有明海では、ヤマモモの木を海中に入れておき、そこに産卵でやって来るコウイカ（甲烏賊）のメスをとって、そのメスを籠に入れてオスをおびき寄せるという何とも人間心理にも通じる漁法がおこなわれている。海中のヤマモモの葉にたくさんの卵がついていたのが印象的であった。いかかごは許可をえた漁師のみが設置でき、漁場は年一回の抽せんで決まる。毎年五月には、江戸時代以前からの歴史をもつとされるいか祭りがおこなわれ、二〇年くらい前まではその祭りの期間だけ若者に漁場を開放し自由にイカをとらせていた。これは、若者に漁業への関心と意欲をもってもらいたいという大人たちの心からの気持ちが受け継がれている行事であったが、近年は若者が少なくなって、漁場の開放はおこなわれていない。

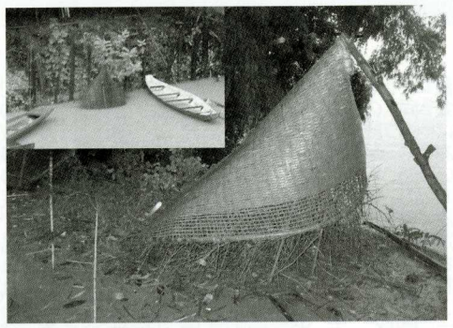
現在、国内の沿岸域では沿岸域の藻場が減り、サカナの産卵場が失われている。いかかご漁は、人為的に木を入れて産卵の場を提供しているので、サカナにやさしい漁業として大学の水産学部なども注目している。効率よく一方的にサカナをとるだけでなく、面倒ではあるが産卵の場を提供するなどサカナを育てながら漁をおこなう（プレ・ドメスティケーション、半養殖とでもいうか）、そうした、サカナと向き合いながらおこなう漁を見つめなおす時期に来ているのではないだろうか。こんなことを思いながら、民博や各地の博物館で筌などの漁具を見ていただきたいと思っている。

（写真1）畔に差し込んだ筌漁具　ラオス北部

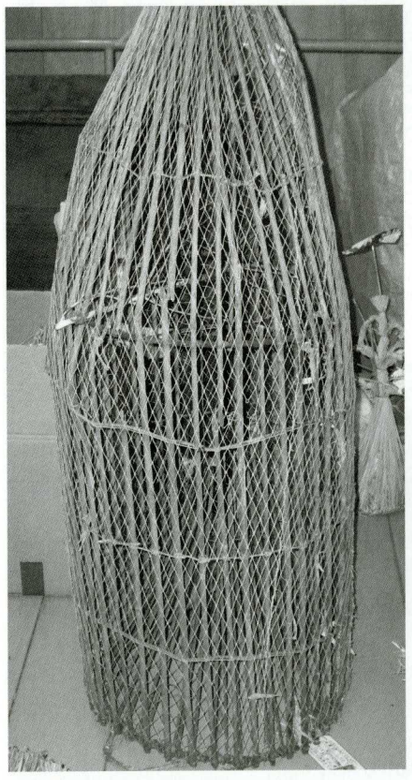
（写真2）
ビエンチャンの
竹細工店で売られている
等身大の筌（中央）と
ミニチュア筌



（写真3）メコンの柴漬フムでの
操業風景（右上は本流のフム）



（写真4）
籠つき柴漬の漁具（カー）
ラオス南部



（写真5）
いかかご（鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵）